

Topic 新しい流れを読む Scanning

Main Topic

日本の体育・ スポーツの財産 東京女子大学 旧体育館解体へ

——歴史的建築物が消える意味

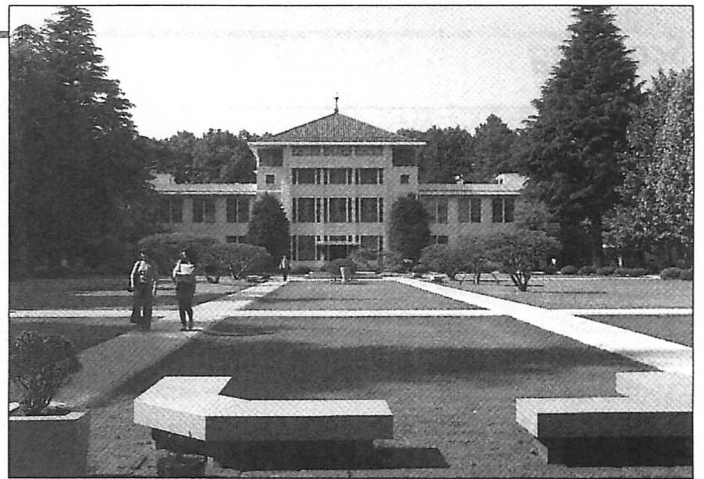
建築的価値があり、歴史的にも社会的にも重要な役割を果たしてきた建物が解体され、新たな建築物に変わったり、更地になるということが、この国では珍しくはない。新聞でも報道されたが、東京女子大学の「旧体育館」もそのひとつになった。

東京女子大学は「日本一美しいキャンパス」という人もいるくらいだが、そこを訪れた人は、誰もがその美しさに圧倒される。それはチェコ出身で日本の建築界に大きな影響を与えたアントニン・レイモンドの設計によるところが大きい。

問題となっている旧体育館は、1924年に完成したものの、築85年ということになる。鉄筋コンクリート2階建てで、両ウィングが暖

炉のある部屋になっている。建物の中央が体育館だが、コートはグラウンドレベルより一段低く、両袖がステージになる。2階は出窓のあるバルコニーで、4つの舞台があることになる。つまりは劇場でもある。天井は、いわゆる体育館仕様ではなく、ホールのように造られている。レイモンドは、その愛弟子の三沢浩氏（三沢建築研究所代表、元レイモンド建築設計事務所勤務）によると、「音と空気の流れをよく納めること」を強調していたそうだ。

この体育館は「兼社交館」と呼ばれる。体育と社交を兼ねた日本で初の建築物ではないかという指摘もあったが、5月20日開催された解体の再考を求める人たちによる「講演&フリートーク」の会



美しい東京女子大学キャンパス。正門から本館を臨んだところ

（5月14日にも開催）では、建築家や卒業生、在學生、大学関係者その他この問題に関心を寄せる人たちが参加、卒業生からは、いかに「社交」に大きな意味があったかが語られた。寮生として入学、卒業その他の機会で、ここはパーティ会場でもあったし、戦後、風呂に使う薪代を賄うためにダンスパーティも催されたと言う。

建築的価値は言うまでもないが、DOCOMOMO（モダンムーブメントに関わった建物と環境形成の記録調査及び保存のための組織）による「日本におけるDOCOMOMO 100選」にも東京女子大学は挙げられている（同じくレイモンド設計の南山大学も選ばれている）。

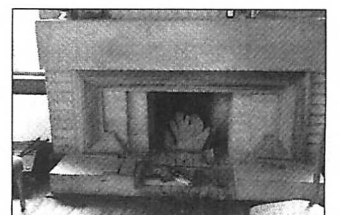
両ウィングにある暖炉つきの部屋は、運動部や文化部の談話室のようなもので、この体育館全体が、「クラブハウス」であったことがわかる。在校生の一人が「人に優しい空間」と表現したが、これほど多くの人に愛された体育館も珍しいだろう。

多くの大学人、建築家、芸術家などが解体の再考を訴え、卒業生の小説家・永井路子さん、詩人の谷川俊太郎さんをはじめ多数の文

化人がその声明文への賛同者に名を連ねた。キャンパスにある「知育・体育・徳育」のうち「体育」を象徴する建物であった旧体育館。「体育」という言葉がここでは生き生きと新鮮に感じられた。

しかし、すでに予定どおり解体作業は始まった。大学側にはそれなりの理由や事情があるだろう。だが、これだけの建築物が物理的に破壊されるのはあまりにも忍びない。建築家のひとりと言っていたが、「設計図があれば同じものが建つということはない」。「体育・スポーツ」がいまだ「文化」としてさほど重要視されていないということであろうか。だとするとその問題は、この旧体育館に留まるものではないだろう。

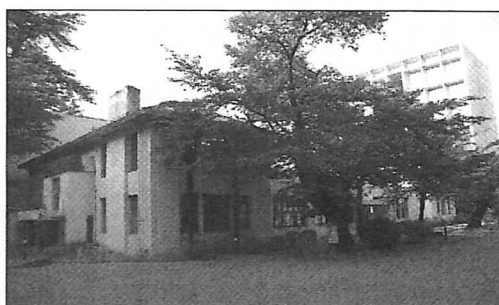
なお、旧体育館跡地は、有事の際の避難場所になり、新たな建築物は建たないそうだ。



暖炉は計5つある。外気を使い、煙は室内に漏れない優れた設計



レイモンド設計の旧体育館



旧体育館外観。新しい建物群との境に立つ



二階の部屋と部屋の間の空間から体育館を臨む